

令和7年度 江戸川区立小松川中学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで学び、深く考え行動する生徒（知） ・心豊かで、地域社会に貢献する生徒（徳） ・心身共に自ら鍛える、たくましい生徒（体） 	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	○生徒・保護者・地域から信頼される学校 ○生徒が夢をもち、生徒の輝く笑顔がいつも溢れる学校 ○自分以外の多様な人を受け入れ、優しく温かい生徒 ○思いやりの気持ちと豊かな心をもちルールを守る生徒 ○人に温かく優しく、仕事に厳しく、サービスには厳正な教職員集団
前年度までの本校の現状	成果 <成果> 統合校として、公務の円滑な運営のために教職員が一致団結して学校運営にあたり。その中で、担当の教職員が中心となり新たな発想を生み出し推進できたこと。またそのことで教員の力量が向上したこと。 <課題> 学力向上に対する全教員の授業改善の課題意識	課題	（学力向上） 基礎学力の定着。全国学力学習状況調査においてすべての教科で都の平均を上回ること。 （生徒主体の安心安全な学校づくり） 生徒会が主体となり学校に誇りを持った生徒の育成

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価（A～D）		「中間」学校関係者評価（A～D）		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	全教員の授業改善の更なる推進	ICT,学習形態、授業形態、使用教材における視点の工夫を取り入れ、年間3回の教員相互による授業観察を行う。	令和8年度全国学力学習状況調査の結果においてすべて都の平均を上回る。	B	A	A	教員相互の授業観察は計画通りに進んでいる。お互いにコメント欄を使用し授業改善に向けての取り組みが定着してきた。	B	今年度の全国学力調査で一定の成果が見られたと聞き、先生方の生徒を引きつける授業改善が進んでいると思っている。	B	年間三回の授業観察週間を設けたことで、授業改善の意識が高まり、生徒の学力向上の取組の一環として一定の成果が出た。	B	教員が生部ということは、一番大事な姿勢である。計画的に研修していることを継続し成果をあげてほしい。	教区課題実践校としての学力向上の取組は続くので、目に見える形で成果を望みたい。
	魅力ある学級経営	学級経営を得意とする教員を中心に据え、過去の実践をもとに校内で共有。分科会を設置し魅力ある学級から学力の向上を図る。	年2回のQUテストにおいて2回目が全学級が肯定的な意見が上回る	B	B	B	1回目のQUが終了し、高寧研修会の「魅力ある学級経営部会」において検証した。次回は10月末に実施予定。	B	学級の様子を客観的に検査で分かるのは大きいと思う。一人一人の生徒を大事にする教育を進めてほしい。	B	年間2階のQU検査を分科会で検証し、可視化することで客観的に自分の学級の様子がわかり変容する一端となった。	A	2回のQUを全体で分析したことで、学級担任が俯瞰して学級を見ることができたことは大きい。共有も図れた。	学校の基盤はクラスである。生徒の変容をいち早く看取り健全育成を図っていただきたい。
	〇読書科の更なる充実	巡回図書担当と本校担当の図書運営の充実	全校生徒への図書室の活用についての説明会の実施を1回実施。	B	B	B	学校図書館のデジタル化が整備され担当者を通して、図書委員会の呼びかけで活性化されつつある。	B	読書離れが進んでいる中、学校図書館が整備されてきた意義は大きいと考える。有効活用してほしい。	B	学校図書館の整備を担当者と小松川図書館の職員と連携し進めた結果、魅力ある図書館が整備され来館者が増加した。	B	魅力的な学校図書館が整備された。外部の力をお借りすることで目に見えるノウハウを教えていただいた。	読書離れが進む中、学校図書館が魅力的になることはとても意義がある。
体力の向上	男女共修を最大限生かした保健体育科の授業改善	工夫した段階的なゲーム形式を取り入れ、教えあい学習を通して体育の好きな生徒を育てる。	新体力テストにおいて全校生徒の体力合計点を昨年度より5%向上させる。	A	A	A	男女共修も開校から2年目を迎え、教えあい学習が定着し、苦手な生徒が体育に前向きに取り組む環境が整ってきている。	A	生涯にわたって健康に過ごすことはとても大切なこと。充実した授業の中で、将来について考える機会を持ってほしい。	A	男女共修の定着により、教えあい学習が進み保健体育科の授業が好きだという肯定的な生徒増えた。	A	体育好きの生徒がさらに増えたことは大きい。生涯スポーツを視野に入れながら、体育のあらゆる種目に触れてほしい。	教えあい学習の効果が現れ、苦手な生徒が好みに変化した割合が増えていることが良い。
	運動部の活性化	各部活動の体力向上にかかる効果的な年間計画の作成	部活動指導員・外部指導員の活用	A	A	A	運動部の加入率も高く、各部活動において大会での成果が大きくみられる。部活動を通して生涯スポーツにつなげていく。	A	部活動が盛んで成果を上げていることは喜ばしいことです。部活動を通して、精神力や仲間の大切さについて学んでほしい。	A	計画的な部活動の取り組みを通して、健全育成を意識した運営を並行して指導してきたことで結果としても一定の成果が出た。	B	外部指導員が多数いる本校は、顧問の指導にプラスアルファして技術指導の充実が図れているために活性化されている。	部活動の活性化は中学生にとって一番の魅力である。地域で協力できることはしていきたい。
	新体力テスト	新体力テストの活用と分析	全国の平均を全学年で上回る。	B	B	B	昨年度は一定の成果が見られたことから引き続き指導を継続している。苦手とするソフトボール投げに力を入れる。	B	一定の成果が出ているとの結果を聞き主体的に運動に取り組んでいる成果が見られていると考えられる。	B	全国の平均を大きく上回る種目が多数あり言っている成果が見られる。柔軟性と握力に課題が見られる。	B	一定の成果が見られていることがわかる。好きになることでさらに主体的な取組につながるような指導を期待したい。	保健体育科の導入部分での体づくり運動が定着し成果が見られるようになってきた。
実現に向けた教育の推進	〇特別支援学級との交流	体育的行事、文化的行事における交流学習	運動会と合唱コンクールの合同実施	B	B	B	行事における交流は計画的に進んでいる。委員会活動の交流を進めていく。	B	特別支援学級があり若いうちからかわりを持つことが、生徒たちの人生において大きなプラスになると思う。	B	運動会や文化祭などの大きな行事を通しての交流があり、練習や準備の段階から影響しあいながら生部体制が整備された。	B	講師を招いてのユニバーサルデザインの研修など特支学級がある学校としての利点を異化した指導を継続してほしい。	前年度に比べて交流する機会も多くなったことは大きい。担任間の交流も進んでいる。
	〇夜間学級との交流	教職員の授業交流の実施 卒業式の合同実施	年2回の授業交流	B	A	A	教職員間の行事運営での交流が進んでいる。部活動の合同実施が定着し異年齢での交流が成果を上げている。	B	夜間学級設置校は都内で8校と聞いている。異年齢の交流も部活動を通して進んでいると聞いている。貴重な経験と思う。	B	交流会を実施し、多国籍の文化に触れることができた。また、学習に対する意識を夜間学級から見習う機会を作れた。	B	具体的な交流が教員、生徒間でもできたことは大きい。さらなる交流を深め刺激のある学校生活を送ってほしい。	2年目になり「夜間学級との交流会」を実施したことでさらなる交流が進むと考えている。
	エンカレッジルームの充実	保護者への紹介及び理解推進	紹介パンフレットの作成	A	A	A	不登校支援員が週5日間配置され対応できている。ルールも確立されたが支援員の生徒対応での苦慮が課題。	A	様々な家庭環境や、生徒の個々の特性がある中で、施設を有効活用して登校しやすい環境があり大きな意義がある。	A	支援員の積極的な運営へのかわりには特筆するものがあった。ERであれば登校する生徒が増え復帰の足がかりとなった。	A	不登校だがエンカレッジルームがあることで、登校できる生徒が増えたことは良かった。指導者の育成も必要だろう。	体制が整い、生徒が楽しく学校に通うことを足掛かりに教室復帰できるよう支援を継続する。
不登校・いじめ対応	不登校対応	「不登校対策委員会」を要とした組織的な対応	年度初めから年度末にかけての引きこもり生徒の減少	B	B	B	不登校加配教員を中心に組織的な対応を進めている。エンカレッジルームに登校できる生徒が増えてきている。	B	静かな環境で、教員でない支援員の存在意義は大きく、生徒の心の支えになっている。教室復帰につながるとうい。	B	不登校対策委員会の情報共有をER運営や学級サポート教室との連携に生かすことで、どこもかわりがない生徒が減った。	B	不登校が減っているわけではないが、個々のニーズに応じた環境作りは現代では必要である。校舎の利点を生かしてほしい。	まったくつながりのない生徒はゼロである。SCやSSWとの交流が進んでいることが大きい。
	いじめ防止	いじめアンケートの活用 QUテストの活用 小松川SNSルールの策定	いじめ（年3回） QU（年2回）の分析・活用	B	B	B	いじめ対応があり、組織的に対応した。教員の情報交換を高め、早期発見、再発防止に努めていく。	B	学校として、いかにいじめが起きない雰囲気を作るか、先生方のアンテナを高くするにかかっている。継続した指導を。	B	年間三回のいじめアンケートを十分に活用し、個別面談をすることで、未然防止、早期発見につながることもできた。	B	必ず前兆がある。そこを見逃さないことが学校としての体制が試される。引き続き指導を継続してほしい。	いじめ未解決ゼロは達成できなかった。アンテナを全教員が高くてできる取り組みを進めたい。

心の充実	個に応じた指導の充実	「特別支援委員会」を要とした組織的な対応	特別支援委員会の毎週1回の実施	B	B	B	特別支援委員会を中心に、SCや常駐しているSSW、専門員や養護教諭からの情報が共有できている。	B	難しい家庭環境、生徒が多い中、教員以外の専門職が効果的に働くことは大きな意義がある。引き続き組織的に対応を。	B	個々の生徒の対応について十分協議し、個別の対応について保護者の理解を得ながら共通理解を図ることができた。	B	様々な特性のある生徒がどこの学校も在籍している。柔軟で丁寧な対応のできる教員が増えれば必ずよりよい成果が出る。	特支委員会を中心にそれぞれの役職が責任を果たし個別対応に当たることができていた。
学校（園）の実現	地域行事への積極的な参加	年間で4回ある大きな地域行事への教員および生徒の参加	全教職員が年1回は地域行事に参加する。	A	A	A	全教員による年1回の地域行事への参加を実施。100名を超えるボランティア生徒も参加。	A	地域の人間としては、地域の子供たちに期待するところは大きい。引き続き協力いただけたとありがたい。	A	年間計画に基づいて、多くの教員が参加してくれたことは大変意義がある。地域で育つ生徒と一緒に育てていきたい。	A	本地域は地域行事がとても盛んである。教員の皆さんが協力的に取り組んでくれて地域としても大変ありがたい。	地域の子供たちを育てる意識を忘れず地域とともに学校の役割を果たしていきたい。
	学校HPの充実	ホームページ委員会の充実	月1000回以上の閲覧回数	B	B	B	学校行事、部活動等の学校の様子を伝えることができています。	B	学校行事の活躍がわかりやすく生徒も保護者ありがたいと思う。	B	学校の様々な取組について開かれた学校づくりを進めた。	B	学校に普段行けるわけではないので、ホームページで伝えることはとても大きいことである。	学年によってバランスが取れるようにホームページ委員会の充実を図りたい。
	学校評議員期の充実	教育課題実践推進校の取組、いじめアンケートの提示	学期に1回の学校評議員委員会の取組	B	B	B	生徒の様子や学校の課題等を、学校評議員会で伝え、客観的なアドバイスをいただき取組の改善につなげている。	B	新しい学校3年目で軌道に乗ってきているのを感じる。地域の生徒のために協力できたらと考えている。	A	地域行事でも多くの評議員の方々とのつながりがあり、評議員会では忌憚のないご意見をいただき充実が図れた。	A	地域の一員として意見の言える学校評議員会の意義は大きい。学校にますます協力して地域の子どもたちを育てていきたい。	管理職だけでなく書簡教諭が参加し、生徒の具体的な様子を伝えていきたい。
教育の展開	魅力ある学級経営と生活習慣の改善に対する取組	学力向上を目指すための分科会①「魅力ある学級経営」②「生活習慣の改善」の取組	QUの結果及び生活習慣改善アンケートの肯定的回答の増加	B	B	B	「睡眠と学力向上」「食育と学力の向上」の2回の講演会を実施し、生徒および保護者の生活習慣改善の取組を実施。	B	学力向上にむけての生活習慣の改善にスポットを当てているのは非常に興味深い。発表を楽しみにしている。	B	3回の外部講師を招いての講演会は、生徒及び教員にとって大きな刺激となった。具体的な生活に取り入れさせたい。	B	基本的な生活習慣を正すことは、現代の子どもたちにはますます大事であると考えている。保護者も巻き込んでほしい。	保護者の参観が少なかったために、計画を整えて取り組みを継続していきたい。
	区の施策の効果的な実践	学力向上を目指すための分科会③「区の施策の効果的な実践」の取組	補習教室を長期休業中に集中的に実施よむYOMUワークシートの年間取組	B	B	B	「区の施策の効果的な実施」分科会が中心になり、よむYOMUワークシートの取組の周知、放課後補習教室の連絡調整を実施	B	学力向上は江戸川区の大きな課題の一つである。本校がその流れに乗って研究していることには大きな意義がある。	B	区の様々な施策について取組ことで、より多くの教員が区の施策についてわかりながら取り組むことができた。	B	区の施策に則って学校全体で取り組んでいることは素晴らしいことだと考えている。継続していただきたい。	次年度も継続した取組を進めていくことから、分科会のさらなる充実を図りたい。
	特支学級の学力向上	教育課題実践推進校の取組としてキャリア教育を柱に据えた取組	ICTを活用した公開授業の実施	B	B	B	計画的に職業や進路学習を進めることができた。	B	生きる力の育成を図ることが一番大事である。働くことのできる知識、ふるまい、健康と体力を身につけてほしい。	B	講師を招いての学習会から、大きな変容も見られた。より充実した具体的なキャリア教育を進めていきたい。	B	働く力を身に着けることは、早ければ早い方がよい。様々な経験をさせることが大事であると思う。	働く意識を高めるきっかけを様々な角度から取り組んでいきたい。